

## 映画「ご縁玉——いのちの授業」 江口方康監督インタビュー

文責・土本亜理子

2008年8月28日

於：東京・六本木 江口監督の友人のスタジオ

## &lt;映画作りのきっかけ 出会い—エリック=マリア&amp;山ちゃん&gt;

Q：映画作りのきっかけは？

江口：エリック=マリアと山ちゃん（山田泉さん）同時に知り合ったんですよ。

去年、山ちゃんががんの転移を知って、子どもたちと旅行をしようとパリに来た。ちょうどパリに山ちゃんの番組を作ったNHKの上野さんがいた。彼と私は知り合いで、彼からエリックというチェリストの話聞き、遊びに行ったら、やはり上野さんが山ちゃんたちを連れてきて、みんなでエリックの家で会い、彼のチェロを聞いたり、いろんな話をしたんです。

その時、山ちゃんが「江口さんは何をしているの？」。私は「いろいろ映像をやっているけれど、いつか映画(長編)を撮りたいと思っている」という話をした。そうしたら山ちゃんが、「撮りたいものは早く撮らないとだめだよ。私も必ず観たいから。早く取らないと私はいつまで生きられるかわからないんだから」って。驚いた。

もっとも私はそこで会った山ちゃんしか知らない。養護教諭の仕事も、「いのちの授業」もみんな知らない。がんになって転移して、二人の子どもとパリに旅行に来た山ちゃんだけ。

最初に会ったその後、ちょうど仕事が終わったばかりで時間があつたから、山ちゃんのパリ旅行につきあつて、観光案内みたいなことをしたんです。「次にどこに行こうか？」とか「何食べようかとか」、パリでの山ちゃんとはそんなことばかり。まさかその山ちゃんを撮ることになるなんて、ぜんぜん思っていなかったんです。

上野さんの紹介で、エリックとも初めての対面だったけれど、なかなかいいヤツで、その後も酒なんか一緒に飲む機会が何回かあつてだんだん打ち解けてきたら、

「12月(2007年)に日本にコンサートに行くことになっていたんだけど、キャンセルになった」と言うことを聞いた。

「それは残念だったね。行けないね」と言ったら、「いや、行こうと思う」とエリック。

「何しに行くの」

「チェロで山ちゃんにセラピーしたい」と彼。

「なんでそこまでするの？」

それまで彼とはそれほど親しくなかったから、酒を飲んでも深い話はしなかったのだけれど、この時、エリックから、彼がベトナム戦争当時の孤児で、フランス人の養父母に引き取られて

育ち、その養母が9年前に山ちゃんと同じ乳がんで死んだことを聞いたんです。その育ての母親が病気だったときに何もできなかった。だから日本に行って、山ちゃんにチェロでセラピーをしないと、彼がそんな話をした。不思議な出会いだと思った。エリックの日本への旅に一緒に行ってカメラを回したらどうだろう、そう思ったんです。だからこの映画は、山ちゃんとエリックの映画というよりは、やっぱりエリックという男を追って撮った映画です。

エリック、とてもすごくナチュラルだったし、日本人への思いが強い。もしかしたら日本人の血が流れているのではないかと、私も思った。というのは、無着成恭さんの話を聞いていたら、ベトナム戦争当時、アメリカ兵の後ろには日本のビジネスマンもいたのだとか。例えば歯磨きを売るビジネスマンがいたり。アメリカ兵の後ろについて販売ルートの拡大を狙った日本人がいて、そういう人が地元の女性と恋に落ちる。そういうこともないではなかったらしい。ただ、エリックはひげを剃るとやっぱりベトナム人の顔だと思うけど（笑）。

### <気になるシーンについて教えてください>

Q：映画の冒頭で、フランス人の若い女の子がエリックさんと話をしている、そのへんのいきさつをエリック自身が語るシーンがありますが、あれは演出ですか？

江口 そう。あれは知り合いの役者さんに頼んで、エリックに対する聞き役になったもらった演出です。

エリック自身、どこからくるのかわからない大きな自身を持っているような感じがしたが、彼はこの旅でその自信がまったく別の自信へと変わるのではないかと、そんな予感した。であれば、日本に行く前に、今の彼を撮っておかなければならない。何故日本に行くのか、日本に行く前の彼はどんなことを考えているのか。私が聞きたいと思ったことを役者の女の子に質問してもらって、あのシーンを撮りました。わざわざパーティをやって、役者の女の子とエリックの近くにカメラを一台据え、遠くにもう一台用意して、撮影慣れしていない彼に、そのことをことわってカメラを回したんです。お酒も入った彼が、女の子の質問に答えていく形式ですすめたんです。

Q：日本に旅立つ前のエリックさんの部屋での撮影は？

江口：すべては彼にカメラ慣れしてもらうための方法で、彼の部屋の一隅にカメラを置いて、それが回っているという状態に慣れもらった。だから、エリックは日本に行く前にすでに撮られるということに対して自然に振る舞うようになっていた。

エリックが日本に行くという話を聞いて、山ちゃんと連絡を取りました。

「山ちゃん、日本に行こうと思うけれど、泊めてくれる？」

「うん、いいよ」と山ちゃん。

「カメラも持って行こうと思うんだけど」

「うん、いいよ〜」

いいって言ってくれた。驚くほど簡単に。あとで知ったけれど、山ちゃん、いろんなテレビに取材されていたから、撮られることに慣れていたんですよね。

私は、せっかくだからカメラを回そう。だったらどんなシーンを作るか、考えた。京都で、

たとえば、楽器を持たずに演奏してみよう。そこにあとでチェロの音を乗せてみよう...とか。いろいろな演奏をして、映画とともにCDも作ってみようとか、そんな話もあったりしたんです。そうしたフィクション的なことを考えたけれど、でも、あとはもう山ちゃんワールド。撮るしかない。そんな演出なんか要らないというか、みんなが美味しそうに魚を食べているときもひたすら撮る。撮り終えてようやく魚を食べられるかなと思ったら、みんなはもう違うことを始めているし、移動もある。ああ〜と追いつくためには食べられない。そんなことばかりでした（笑）。

Q：映画の冒頭、朝、起きがけの山ちゃんがボサボサの頭のまま、大根を切ったり、ネギを切ったりして朝ご飯の用意をしながら、「子どもの前では泣けない...」と本音を語る、とても印象的なシーンがありました。ああした本音は撮影後すぐに撮れたのですか？

江口：そうです。山ちゃん、カメラ向けると話してくれました。そのときの気持ちをそのまま話してくれる。撮影はとてもしやすかった。エリックもカメラを気にしなくなっていたので、二人とも自然に撮れたというのがあります。

私がビクビク気にしていたのは、音がちゃんと採れているかな、ということ。音が採れていたらカメラの針が動くんですが、それがよくわからなくて...

Q：どういうことですか？

江口：実はちゃんとしたカメラを回すのは、私自身、初めてだったんです。いつもは私が演出、そしてカメラマンと一緒に撮影するんですが、今回、エリックは山ちゃんの家滞在するという。そこに私も行かせてもらうわけで、さらにカメラマンだ他のスタッフだ...と、人が何人もいるという状態が想像つかない。また、そういう形だと自然なものは撮れないと思ったんです。だから僕がカメラもやって、一人で行こう、と。急遽カメラの使い方を教わってそれで日本に行ったので、音の状態をきちんとチェックするまでいなくて、いや、ほんとにビクビクしていたんです（笑）。でも、結局60分テープを80本も回しました。

Q：最後の方ですが、エリックが子どもたちにバリカンを持たせて頭を坊主にするシーンが出てきますが、あれは最初の旅ですか？ どうして丸坊主だったんでしょう？

江口：あれは彼が山ちゃんたちと日本で過ごして、フランスに帰ってから、五円玉の縁で三ヶ月後に再び日本に来たんです。その時に「聖ヨセフ」にまた行き、その時にホスピスにも行っただんです。

あの髪を剃るシーンは、山ちゃんが抗がん剤治療を始めることを知って、それを始めると髪の毛が抜けると聞き、じゃあ、自分も坊主になろうって。剃るなら、聖ヨセフの子どもたちというのは、彼の遊び心。彼はあそこの子どもたちと遊びたかった。チェロで遊ぶことはもうした。次は何か？ そうだ、彼らに坊主にしてもらおうって。「バリカンある？」とエリック。「何するの？」と僕。「髪の毛を剃る」「ふ〜ん...」そんな感じでした。

Q：その髪を剃っていた丸坊主の小さな男の子、ゆうとくんが、エリックにとっては彼の幼い頃を思い起こさせる子どもだったと、山ちゃんの本にありましたが...

江口：そうですね。あのゆうとくんは自分だとエリックが語るシーンもあるんですが、でも使いませんでした。というのは、僕が撮ったものの中でゆうとくんが説明し切れていない。ソファで Denguri 返しをしたり、エリックについてまわったり、チェロを弾くシーンはあるけれど、ゆうとくんの視線でカメラが入っていない。そういうことを字幕で説明するのはいやだったし、どうするか僕自身も悩んだんです。それで一度は切ったんですが、でも、やっぱりそういうシーンはいるかなと。新たに編集したものでは、ゆうとくんは誰かということ、その顔に思いっきりシンクロさせて出せばいい、そう思ってやっています。

Q：映画の最後に、エリックさんが橋を渡るシーンがあります。あそこにこめた思いは？

江口：まさしく彼は日本で山ちゃんに会って変わった。ホスピスや聖ヨセフに行って何かを感じたんだと思う。セラピーをしている彼は本当にいい顔だった。仏陀が入ったのではないかと思うようないい顔だった。エリックは福耳だし、本当にいい顔なんですよ。

ご縁があって、出会って、しかし、やがてエリックは町に戻っていく。「十牛図」(禅において悟りを牛に例え修行の道程を表現するための説明図)です。牛と一緒にいるけれど、最後の「九」のあと町に戻っていく。その町は橋の向こうにある。だからエリックに橋をわたってもらったんです。

あの橋は京都の流れ橋。橋桁がつながっている。最初、役者を使って、おばあさんとまごが話しているシーンも入れたのですが、山ちゃんとエリックの出会いを撮っていくうちに、現実の二人にフィクションは勝てないと思った。だから橋のところの役者を使ったシーンは切ったんです。

### < 監督が語る主役たち エリック = マリア・クテュリエと山田泉 >

Q：江口さん自身、印象深いシーンは？

江口：最初に宇佐の駅でエリックと山ちゃんが出会ったところ。あの二人の間(ま)が大好きです。駅の階段の上からエリックがチェロケースを転がす。あのケースにチェロが入っていないことは知っていたけれど、あっ、面白いなと思ってカメラを持ってこけないように僕も階段を下りた。そしたら下で待っていた山ちゃんがエリックを見て、驚いてる。「本当にきたの?」「本当にここまで来たの? 来たんだ!」ってエリックの腕を触ってみる。外国人が遠くから日本に来た、その感じが出ていたし、何より言葉の通じない二人だったけれど、「人間が会った」という、なにかあったかい感じがあって、あの距離感が好きでしたね。

ずっと気になっていたのがエリックと山ちゃんの距離みたいなものかな。パリで会って御縁があったねということで日本で再会したけれど、ずっと二人には微妙な距離があった。言葉の壁があったし、見知らぬ国だし、山ちゃんには家族もいるし...

エリックの日本滞在の一番最後、チェロのセラピーが終わったとき、真ちゃん(山ちゃんの夫、真一さん)もいたけれど、山ちゃんとエリックが感極まって抱きついてハグした。これはもうしょうがないよねって感じで。

Q：チェロ・セラピーに立ち会った印象は？

江口：山ちゃんがどんどん変わっていったというか、気分的にリラックスできたんじゃないかな。トランス状態になってしまうっていうのもあると思う。ボロボロ泣けて、おじいちゃんに会ったとか、いろんな話が出てくる。終わったときに「どうだった？」って聞くと、心の奥に沈殿しているものをすくい上げて話していた。

ただ、エリックには言ったんです。何回目かの時だけ、「お前、気を付けた方がいいよ」と。よくあんまさんや指圧をする人もそうだけれど、手はいろんなものを与えるけれど、同時にいろんなものを吸収してしまう。山ちゃんが楽になったぶん、エリックが苦しいことになる可能性もあるわけで。

とくにエリックはセラピーをしている間、ずっと山ちゃんに呼吸を合わせて、思いもどこか合わせていた。山ちゃんの息が荒くなってくると、エリックもそれに合わせて荒い音で弾く…。エリックが山ちゃんの息を鎮めようとして弾くけれど、それが戻らない。その夜、セラピーが終わったときの彼女の話は、いろいろだったけれど、俺はそうした山ちゃんの話のエリックには訳さない。エリックのへたな日本語と山ちゃんのへたな英語で、勝手にやってくれ、と。でもどこかで二人は気持ちの上で通じていたようだった。「なんとなく俺はわかってたよ」とエリックはそう言っていた。そういうところを狙っていたのです。

エリック自身、ああいうセラピーは初めてで、どんどん入っていくけれど、本当に山ちゃんの大変な部分を受け止めるキャパがあるのか？ 大丈夫か？ と思っていた。エリックも怖かったこともあったという。それを感じたとも。でもなるべく呼吸を合わせ、何も考えないようにしようとしていた。そういうふうに見えましたね。

Q：パリで会って、その後、日本で時間をともにした山ちゃんの印象は？

江口：けっこうシンクロするんですよ。姉がいるんですが、姉と山ちゃんが同い年。さっきも言いましたが、山ちゃんの業績は知らない。写真や本は見たので、なんとなく、そういう人なんだ…と情報は得ましたが、実際のところは知らなかった。それで日本に来て、一緒に過ごさせてもらおうと、へえー、こういう人なんだとか、ええ、なんで？ と思うこともあったり。

山ちゃん、外の人にはすごい存在感があるけれど、中を支えているのは真ちゃんだとか（笑）。山ちゃん、すごくいい人で素晴らしい人、そういうイメージがテレビや本であるのだと思うけれど、一緒に過ごしてみると、話し好きなおばちゃんって感じもある（笑）。

それで何がすごいのかというと、結局、エリックも俺も、山ちゃんの回りを回ってるんだと思ったこと。

セラピーの一回目は「へんな気分。面白かったよ」と言っていた山ちゃんだけれど、二回目はわんわん泣いて、お父さんの話をしだしたり、自分ががんの末期だということも当然あって、いろんな話が出てくる。それで人を傷つけることがあって、それを彼女もわかっている…。そういうことも出てくるのだけれど、いろんな山ちゃんがそこに居て…。

お母さんとしての山ちゃん、講演をする山ちゃん、妻である山ちゃん、友人としての山ちゃん、…、ずっと見てみると全部違う。同じソファに違う山ちゃんが座っていて、どの山ちゃんが本当の山ちゃん？ って思うけれど、ふと見ると影は一つしかない。とらえどころがない、

そこがすごく魅力的なんだなと思いましたね。なんか不思議な人ですよ。

Q：エリックさんの印象は変わりましたか？

江口：エリックは、そもそも孤児だったから、彼自身がどこから来たのかわからない。妹もベトナムから養女として別のところに引き取られたけれど、その妹が乗った飛行機が落ちてたった数人しか生き残らなかった。妹はなんとその数人の一人だった。彼自身、そのように実に数奇な運命の人でした。

映画ができて、パリで彼を知っている人に見せたら、「エリックがすごくいい奴に映っている。天使みたいだ。なんで？ こいつ、こんなにいい奴だったっけ？」って（笑）。関係者は笑っています。でも、もともとエリックには、何か思いがあったり、ピュアなものがある。その中にもう一つ、きびしい鬼のような面があり、それをいいエリックが覆い隠してる。今回は、その覆い隠された彼のピュアな面が出たんじゃないかな。永遠と輝いているその部分が出たように思う。映像は嘘をつけないから。聖ヨハネやホスピスで演奏した彼の表情に嘘はないし、だからこそ、子どもたちやホスピスの人たちの胸を打つ何かがあった。彼のもともと持っているピュアな部分を感じたのだと思うんです。

#### <この映画は、私の「いのちの授業」だった>

Q：最後に江口さん自身のことを少し聞かせて下さい。なぜ、パリに住んでいるのですか？

江口：それは話すとすごく長い物語になってしまいます（笑）。映画をやりたいと思っていたけれど、お芝居の世界に入ったんです。劇団に入り、役者をやったり、制作をしたり。そのうち藤田敏八さんと出会って、彼に助監督の仕事をさせてもらえないかと頼んだり。ただ、一回も日本を出たことがなかったので、出てみよう。そんな旅を始めて、ロンドンにたどり着いて。そこで映画学校で学ぶイギリス人やドイツ人に知り合いが出来、やがてパリにわかって、映画のプロダクションに入ることができたんです。

そこは日本のコマーシャルの仕事をやっている、フランス語は少しでも、英語ができればなんとか働ける。そこでいろんな人とめぐりあい、やがてNHKの仕事もするようになりました。フランスで結婚して18年。子どももできて、生活の基盤があちらになり。

NHKの仕事はずいぶんした関係で助成金がもらえることになり、映画学校の短期監督養成コースを受講して、そこでさらにいろんな友人ができ、プロダクションから独立して、自分の会社をもつようになりました。

NHKの美術番組をやったりいろいろやっていますが、長編を撮りたくて脚本を書いていたんです。

Q：それはこんどの作品とリンクしていますか？

江口：まったくリンクしていない（笑い）。目指していたのは思いっきりフィクションの世界でしたから。デビット・リンチが好きで、ああいうおどろおどろしい世界がよかったし、好き

な作家は泉鏡花や谷崎潤一郎だし。泉鏡花が大好きで子どもに鏡花という名前をつけたぐらいですから。ですから今回のテーマはいままでとは全然関係ない。何でお前がこういう映画を撮っているの？ みんな思っていると思います（笑）。

これはまさしく私にとって「いのちの授業」だった。長編を作りたいと思ってはいたけれど、ぐずぐずしていないで早く歩きなさい。楽したい、楽したいと遊園地に行くのになかなかぐずって歩かない子どもに、山ちゃん、ほら、一緒に早く歩こうよって。

聖ヨハネの養護施設もホスピスも、日本に行くまでそこに行くことを想像もしていなかった。子どもたちの養護施設とホスピスをつなげて撮ることができるなんて…。そんな映像がこれまでであったらどうか。まさかこういう展開になることを、まったく考えていなかったんです。ひょっとしたら私が山ちゃんの「いのちの授業」の素直な生徒だったのかもしれない。

いろんな人からご縁をもらっても、これまでだってもらってきたけれど、相手に返せなかった。でも、響き合わないと何も生まれない。ただ居てくれる人がいっぱいいたら…。そういうのが大切だなって思ったんです。家族とか、同じ釜の飯を食ったとか、そういうことではなくて、ぜんぜん違う人がご縁があって響き合う。それってすごくヒューマン。この映画作りを通して、私は貴重な体験をさせてもらったなと思っています。

Q：今回の日本への帰国は？

江口：山ちゃんがホスピスに入院したって聞いたこと。お見舞いに行きたかった。それとこの映画についていろいろ考え、意見を下さる方々がいらした。その人たちに会いたかった。配給についても話を進めたかった。それともう一つ…。

あのホスピスで撮影させていただいた3人の患者さん、すべてもう亡くなっていると聞きました。そのご遺族の方々に、映像を届けたかった。この映画を届けたかったのです。

これから大分に行きます。会いたかった人たちに会ってきます。

（了）